

大安寺木彫群の製作背景と造立年代について

奈良大学 友鳴 利英

大安寺木彫群は、日本彫刻研究史上研究が進んでいるとは言い難く、多くの問題が残されている。本発表では、その諸問題の内、製作背景について考察し、それを指導した人物と造立年代及び、作者像について検討してみたい。

発表者は以前、大安寺四天王像に用いられている意匠が戒壇院厨子扉絵や正倉院漆金銀絵仏龕扉に描かれた神将像のものと似ているものが多いこと、大安寺広目天像が当初は戒壇院像や正倉院像の内の一体にみられる、大刀を突く形姿であったという一文を発表した。大安寺旧蔵興福寺北円堂持国天像も大刀を突く形姿であり、奈良時代後期から平安時代初期の大安寺において大刀を突く神将像が重要視されていたことが窺える。戒壇院像や正倉院像は、鑑真将来の図像であるとする説が出されており、本発表においても意見を違えない。奈良時代における大刀を突く神将像の他の作例をみると、これら全てが鑑真一行の関わり、若しくは鑑真来朝以降の意匠が用いられていることが知られる。このことから、大安寺における鑑真一行のいずれかの人物の活動が考えられる。

鑑真一行の中で、史料上明確に大安寺での活動がみえる人物として、鑑真の高弟の一人、思託の名が挙げられる。本発表では、大安寺木彫群の造立に関与した人物として思託の存在を検討してみたい。

鑑真一行の、大刀を突く神将像に対する信仰の一端を示す一説が、『唐大和上東征伝』に記載される。即ち、第五回渡航時の記事「中夜時、舟人言、莫怖、有四神王、着甲、把杖、二在舟頭、二在檣舳辺」の部分で、杖を持った神王についての場面である。この杖を持った神王こそが、大安寺像などに見られる大刀を突く神将像であると考えたい。

大安寺四天王像の造立年代については、思託の大安寺での活動と交友関係に着目したい。思託の交友関係で注目すべき人物は、淡海三船と早良親王である。三船は『東征伝』を撰述した人物であり、大刀を突く神将像が描かれる戒壇院厨子扉絵にも三船筆の奥書がある。思託著『延暦僧録』には、鑑真の弟子となった記事がみえ、思託との関係も深かったと考えられる。この三船と親しく接し、大安寺に居た人物に早良親王が居る。この早良親王と思託の直接の関係は、史料上はみえないが、三船を介在した親交があったと考えても不思議は無い。

これらの思託の交友関係を軸に、大安寺での造仏状況を検討すると、『大安寺碑文』に記載のある早良親王による大安寺伽藍復興が注目される。この伽藍復興では、造仏も行われていたようで、思託や三船らの関与もあったと考えられる。この早良親王による伽藍復興時に造立されたのが大安寺木彫群であると考え、造立年代は、伽藍復興の行われた宝亀元年(770)から宝亀6年(775)と結論付けられる。

作者系統としては、大安寺の造仏状況や早良親王と実忠の関係、像の様式などを総合して判断すると、造東大寺司系の工人を想定したい。